

労働用具

岡 本 勇

- 1 一般的狩猟具の種類と機能
- 2 主要な漁撈具とその役割
- 3 磨製石斧と打製石斧

人間は労働することによって、他の動物から区別され、その歴史を創造してきた。労働とは、いうまでもなく人間と自然とのあいだの一過程であり、基本的にはつねに労働用具を媒介として展開される。そして、「遺骨の構造が滅亡した動物種属の身体組織の認識に対してもつのとおなじ重要さを、労働手段の遺物は滅亡した経済的社会構造の価値の判断のために有する」（マルクス）といわれるよう、労働手段の遺物、つまり（主として）労働用具は、歴史の研究において大きな役割をしめているのである。縄文時代の人間は、労働用具を主要な武器しながら、自然とたたかい、その歴史をゆるやかではあるがすすめてきた。

ながい縄文時代を通じて、その経済と生活をさえたものは、狩猟・漁撈、および植物採集を中心とする労働活動であった。これらの主要な労働活動に使用された道具、すなわち狩猟具・漁撈具および工具などをめぐって、若干の問題にふれることをここでの課題としたい。しかし、一概に狩猟具あるいは漁撈具などといっても、考古学上の数ある遺物のなかには、用途の不明のものが多く、推定の域をでないものも少なくない。

1 一般的狩猟具の種類と機能

狩猟具として、その名をあげることのできる遺物には、石鏃・石槍などがあり、また副次的な意味で石斧等がもちいられたこと也有ったろう。さらに家犬が狩猟のうえではたす役割は、きわめて大きかったにちがいない。

木製の弓 弓矢は、狩猟活動のうえで、もっともゆきとどいた一般的な器具であった。各時期・各地域にわたってほぼ普遍的にみとめられる石鏃は、このことを端的にものがたっている。しかし、もとより石鏃は、矢の一部分にすぎないから、これのみをもって弓矢の本来の機能を十分にすることはできない。

弓は、木または竹でつくられたとおもわれるが、このような植物性の遺物は、泥炭層遺跡や低湿地遺跡などのごくかぎられた条件の場所にしかこされていない。千葉県安房郡加茂遺跡からは、前期の諸磯a式土器とともに木製の弓が発見されている⁽¹⁾。イヌガヤ製の丸木弓で、比較的小形（現長33cm、半身を欠く）であるが、弾の部分には弦をかけるための切込みがほどこされている。また、青森県八戸市是川中居遺跡は、晩期に属する泥炭層遺跡であり、

多数の木製品や籠胎漆器を出土したことで有名である。ここからは、朱漆塗木太刀・籠状木器・櫛・腕輪などの木製品とともに、断片をもふくめて十数例の弓が発見されている⁽²⁾。これらのなかには、一本づくりの丸木弓と、二本以上の木をあわせた合弓の二種があり、それに朱や黒の漆を塗ったものもみられる。さらに桜の皮や糸をまき、弔りや弭の部分には念いりな彫刻をほどこすなど、一本の弓にそがれた苦心のほどをしらべることができる。大きさは、計測できるものについていみると、長さ70cm前後のもの、おなじく110cm・140cm、およびそれ以上のものなどがあり、概して小形の弓（短弓）の多いのが注意される。

是川遺跡出土の弓は、かつてこれが石器時代の作かと人びとをうたがわしめたこともあるほど、精巧に入念につくられている。これらは、爛熟をほこったいわゆる亀ガ岡文化の所産である。晩期の時期に東北地方に発達したこの文化は、縄文時代のなかでも特別な位置をしめるものであるから、是川遺跡の弓をもって、縄文時代の弓一般をおしあなづかることは、もとよりただしいことではない。しかし、亀ガ岡文化が縄文文化のいきついたすがたであるとすれば、是川の弓もまた縄文時代の弓のいきついたすがたであるとかんがえてよいであろう。

縄文時代後・晩期の骨角器のなかに「弭形角製品」⁽³⁾とよばれている鹿角製品があり、ふつう弭とかんがえられている。かなり丹念につくられているものが多く、もしこれがうたがいなく弭であるとすれば、それをつけた弓の立派さを推してしがいよう。もちろん、加茂遺跡やその他でみるような、弭などをつけない簡単なつくりの丸木弓も多数つかわれたではあるが。

石鎚 やじりのなかには、骨やイノシシの牙でつくったもの（骨鎚・牙鎚）もあるが、ふつう一般に製作・使用されたのは石鎚である。石鎚は、時期や地域によって、そのあらわれかたにいちじるしい偏差があるけれども、ながい縄文時代を通じてのもっとも普遍的な遺物であった。

縄文時代の石鎚は、まれに局部をみがいたものもあるが、すべて打製によるものである。石材としては、黒曜石・珪岩・硬質貞岩^{けつがん}・粘板岩・安山岩などのかたくて、打ち欠きやすい石がえらばれており、これらは地方的に特色をみせている。北海道では黒曜石が支配的であり、東北地方では硬質貞岩が圧倒的に多い。また、近畿地方や瀬戸内海沿岸では、ほとんどがサヌカイトとよばれる安山岩にかぎられている。各時期を通じて、原料の供給地とその播布範囲には、一定の枠があったものとかんがえられる。



図1 縄文時代の
弓 右・黒漆
合弓・長さ
140cm, 左・
丸木弓・現長
56cm
(青森県是川
遺跡, 芹沢長
介による)

石鎌には、石材の差をこえて、さまざまなかたちがしられている。まず、無茎と有茎のものがある。いわゆるなかごをつくりだした有茎石鎌は、無茎のものにくらべると、着柄に効果的であり、道具としては一歩すすんだかたちである。東北地方の北半では、すでに前期にあらわれるが、一般化するのは後期になってからである。無茎の鎌には、二等辺三角形を呈したもののがかなり多く、またその底辺にあたる部分を彎曲させたものも少なくない。彎曲のいちじるしいものに鍔形鎌があり、これは、早期の押型文土器にともなう。さらにそれがいっそう極端になったかたちの長脚鎌は、長野県諏訪湖底の曾根遺跡⁽⁴⁾（早期初頭）などから発見されている。また、将棋の駒のようなかたちをした五角形鎌は、関東・東北地方の早期にみられるなど、一

般に早期には、前・中・後の時期に比較してかたちのバラエティが目だつ。北海道のある時期にあらわれる石刃鎌や、九州の一部などでみられる有刺鎌は、特殊な技法によってつくられたものであり、その文化的な脈絡が大陸との関連において問題とされている。かたちの大小も注意されてよいだろう。ふつうは長さ2cm前後の大きさのものが多いが、関東・中部地方の早期の古いころには、きわめて小形（1cm未満）の三角形鎌があらわれる。一方、中期にはかなり大形のものがしられている。後・晩期には、いくつかのかたちの石鎌がセットとして出現する。対象とする獲物の種類によって、矢を区別したのかもしれない。

まえにもふれたように、石鎌のあらわれかたには時期や地域による差がいちじるしい。たとえば、関東地方にかぎっていえば、鶴ガ島台式土器・諸磯b式土器・安行III式土器などの時期には、比較的多量の石鎌がみられる。多量の石鎌の出現を狩猟活動の盛行とのみ速断することはできないが、十分にかんがえてよい問題だろう。また、関東のうちでも、茨城・千葉方面には、石鎌の出土は比較的まれであり、その理由の一つには、石材の供給地からとおいということがかんがえられる。また、骨鎌や竹鎌の使用を考慮にいれなければならないし、さらにその地域での漁撈活動のしめるウェイトを評価すべきであろう。

石鎌は当然のことながら、矢柄に固定するわけであるが、このばあいアスファルトを利用した例が、東北地方を中心にいくつかしられている。アスファルトは油田地帯で採集された天然のものであり、その利用範囲は多岐にわたっている。また、石鎌を着柄するばあい「根ばさみ」と称する骨角器に嵌入し固定させることが、後期以降東北地方や東海地方でしばしばおこなわ

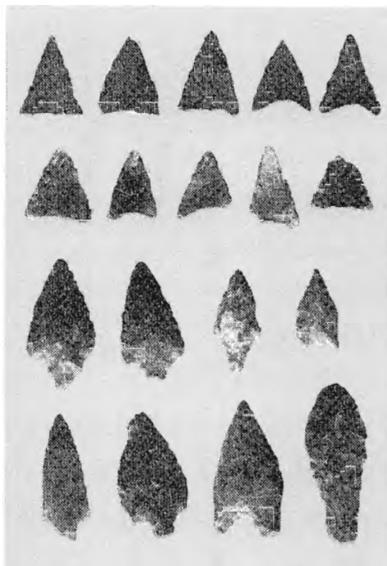


図2 石鎌

上・早期（神奈川県鶴ガ島台遺跡）、
下・後期（新潟県上三光遺跡）縮尺1/2

れた。なお、宮城県牡鹿郡沼津貝塚⁽⁵⁾などからは、石鎌（無茎）が鹿角製の燕形鉛頭の先端についたままで発見されているが、このばあいの石鎌は、矢の部分では

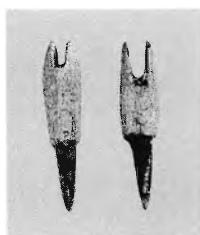


図3 根ばさみ
(宮城県沼津貝塚、伊東信雄による) 縮尺1/2

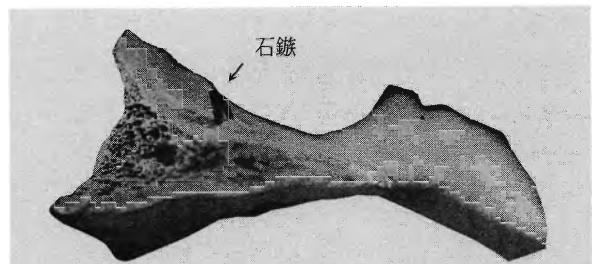


図4 石鎌の射こまれたイノシシの骨(静岡県覗塚貝塚、内藤晃による)縮尺1/2

なく、あきらかにモリの部分であり漁撈具の一部であったわけである。

弓矢の機能 弓矢は、狩猟具としてどれほどの機能をもっていたであろうか。かつて、愛知県渥美郡伊川津貝塚から出土した人骨（成人男子）の尺骨には、珪岩製の石鎌が射こまれたままの状態でのこっていた⁽⁶⁾。また近年、浜松市覗塚貝塚よりは、イノシシの坐骨の一部におなじく安山岩製の石鎌の突きささった資料が出土した⁽⁷⁾。このほかにも類例が一、二しられている。覗塚例を報告した内藤晃は、その資料にもとづいて、「石鎌を射出した狩猟者は猪の真横よりほぼ一五度の角度だけ後方に位置し、しかもそれは標的に対してかなり接近していたことが推定される」と述べている。たとえ、いかに至近距離から矢が発射されたとはいえ、皮や肉をつらぬいて骨にまでふかく達するほどの威力を、弓矢がそなえていたのだということを、これらの資料は雄弁にものがたっている。そして、これだけの威力もっておればこそ、弓矢は狩猟具としての——あるいは武器としての——役割を十分にはたすことができたのである。しかし、この矢を射たれたイノシシは、骨にまで達する深手をおいながらも、それは致命傷となることなく、その後かなりの期間生命をたもっていたことが、骨の増殖からうかがわれるという。伊川津貝塚の人骨のばあいも、生前に石鎌が摘出され、その先端部のみが骨内にふかくのこされていた。この事実はまた、弓矢のもつ機能の限界をおしえている。つまり、矢が急所に命中し、致命傷をあたえないかぎりは、獲物を射とめることは困難なわけである。狩猟者たちは、どこが動物の急所であるか、おそらく、伝達された知恵として十分に認識していたであろう。

弓矢は、本来一匹の獲物を対象とする個人的な狩猟具として登場し、その作業は単独または少人数の組によってすすめられたとかんがえられる。早期の段階の集落構成人員は、10~20人前後の規模であったと推定されるが、この集団のうちで狩猟に参加できる技術と資格をもったものは、おそらく数人以下にすぎなかつたであろう。この少人数のハンターでは、わなやおとしあなどのような計画的な狩猟はむずかしく、また巻狩などの大規模な集団的な狩猟はほとんど不可能である。したがって、弓矢や槍による個人的な狩猟がもっぱらとならざるをえない。早期に属する石鎌には、かたちのバラエティが目だち、また出土数が比較的多いのは、そのよう

な事情と関連があるのではないか。しかし、前期・中期以降にみられる集落の膨張は、その内部により多数のハンターを擁し、さらに計画的なあるいは集団的な狩猟の確立をも可能にしていったと想像される。そして、集落と共同体の膨張は、狩猟活動の多様化による収穫量の増大にささえながら、両者はいわば車の両輪となって社会の進歩をうながす一つの力となつたのである。

槍の存在 一般に槍は、弓矢とならぶ狩猟具・武具であり、とくに弓矢の出現する以前、つまり旧石器時代（後期）にはさかんな発達をとげた。日本においても、先土器時代のある段階に槍さきとかんがえられる尖頭器が盛行し、「尖頭器文化」の名称をうむにいたっている。しかし、弓矢がひろくゆきわたっていた縄文時代には、槍の存在はいたって影のうすいものであった。

いわゆる石槍の発見例は、北海道・東北地方ではやや目だっているが、関東・中部地方ではまれであり、しかもそれらは主として早・前・中の各期にかぎられている。また西日本では、確実なものはほとんど報告されていない。甲野勇は、「此様な分布状態は、縄文式の時代に北方へ行くほど、石槍の使用が必要とされた事実を示すものである」といっている⁽⁸⁾。槍には、「突き、刺す」という機能があるが、その操作は手持槍のばあいにしろ、投槍のばあいにしろ、身ぢかな範囲に限定される。したがって、比較的うごきのおそい大きな動物——たとえばクマやイノシシなど——に対して、とくに効果があるといえよう。石槍の分布は、あるいは動物相のありかたと関連があるのかもしれない。

縄文時代の石槍は、いずれも両面加工で、かたちは木ノ葉形を呈するものが多い。北海道出土のものには、大きな柄（茎）をつくりだしたものがある。石材には、他の剥片石器一般とおなじく黒曜石（北海道）、硬質頁岩（東北）などが利用されている。また、関東・中部地方でまれに発見される中期の石槍には、頁岩・粘板岩がつかわれており、そのつくりは概してあらい。最近、注意されるにいたった有舌尖頭器は、先土器時代の終末期から縄文時代のはじめにかけて出現した石器であり、有茎石鏃の大形化したようなかたちをしているが、これらは槍さきとして役立てられたものとおもわれる。石槍の名でよばれるものが、すべて槍さきであったかどうかは、大いに疑問である。槍さき形の石器が短剣として利用されるばあいも、諸外国の例から推してかんがえられなくはない。

家犬の役割 縄文時代の貝塚からは、イヌの骨格がしばしば発見される。しかも、そのなかには、あさいピットを掘って丁重に埋葬した例がかなり数多くしられている。これは、イヌが他の動物とは異なったあつかいをうけていたためである。ながい縄文時代を通じてイヌは、唯



図5 有舌尖頭器（愛知県二本木遺跡、紅村弘による）縮尺2/3

一の家畜であった。そして、この縄文人にとってよき伴侶であった家犬は、とりわけその資質からみて、狩猟のさいに重要な役割をはたしたとおもわれる。狩猟活動のうえで獵犬のしめる位置を、あらためておもいおこすべきであろう。

縄文時代のイヌは、比較的小形のものがほとんどで、今日の柴犬などはこの血統に属するらしい。日本に独特なこの小形のイヌは、早期のはじめから存在し、かなり普及していたことがあきらかである。昭和26年、愛知県渥美郡吉胡貝塚（後・晚期）^{より}の発掘が、文化財保護委員会の主催でおこなわれたが、このさい埋葬されたものをふくめて10体分のイヌの骨格が出土した⁽⁹⁾。一方、おなじこの発掘では33体の人骨がえられている。この数字にもとづけば、イヌと人間の割合は、10対33ということになり、きわめて多数のイヌが飼育されていたことになる。もとより、このような単純な比較は、事実をただしくつたえるものとはおもわれないが、一つのパロメーターとはなるだろう。

狩猟の対象 縄文人にとって狩猟の対象となった獲物は、いったいどんな種類の動物だったのだろうか。貝塚には、かれらが食料に供した動物の遺骨がふくまれている。もっとも一般的に、しかも数多くみいだされるのは、イノシシとシカであり、大半の貝塚では約9割以上がこの両者でしめられる。ほかに哺乳動物としては、ウサギ・タヌキ・キツネ・アナグマ・テン・サルなどが目だち、およそ食料となりうるものならば、なんでも捕獲していたような印象をうける。また鳥類としては、アホウドリ・マガモ・キジなどがある⁽¹⁰⁾。貝塚における遺骨がしめすとおり、狩猟のおもな対象はイノシシとシカであった。この二つの獣は、当時多数棲息していたわけであるが、しかしそれとても、繁殖率をうわまわるほど捕獲すれば、急激に減少せざるをえない。幼獣や雌の骨がわりあい少ないという事実から、意識的に乱獲をさけていたとみるかんがえがあるが、たしかに狩猟技術のすすんだ段階では、そうした統制が必要となってくるだろう。

2 主要な漁撈具とその役割

漁撈は、狩猟につぐ重要な労働活動であるが、周囲を海でかこまれた日本のはあいには、とりわけ大きな役割をになっていた。縄文時代における漁撈、つまり（主として）魚類の捕獲には、およそ三つの大きな方法があった。釣ること・突き刺すこと、網をもちいることの三つである。ほかに、小さな河川などではやなや、うけによる漁法もおこなわれたとおもわれるが、それを証明する遺物はいまのところ皆無である。ここでは、三つの漁法に関連ある道具、すなわち釣針、モリ・ヤス、土錘・石錘などを中心に説明をすすめていきたい。

釣針の諸相 釣りは、いうまでもなく釣針を不可欠の道具としておこなわれる。釣針はシカの角を材料としてつくられたが、まれに骨製のものや石製のものがある。鹿角製釣針には、いろいろなかたちのものがしられている⁽¹¹⁾。まず、大きくみて、結合式のものと、一本づくり

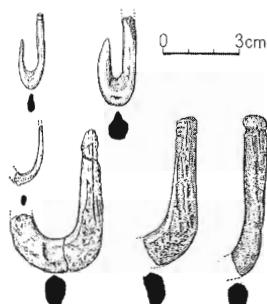


図6 早期末の鹿角製釣針
(神奈川県吉井貝塚、神
沢勇一による)

のものがある。前者は、適宜に細工した2本の棒をV字状にむすびあわせたもので、ふつうの釣針より製作は容易であるが、魚を釣りあげにくいという機能上の難点をもっている。青森県八戸市赤御堂貝塚（早期後半）からは、この型式の釣針が数例出土しており、一般に早・前期に多くみられる。一本づくりの釣針は、鹿角を半截し扁平にしたものから、順次つくりあげていくのであるが、その製作はなみたいていではない⁽¹²⁾。大きさは、4—6 cm程度のものがふつうであるが、なかには10cmにもおよぶ大形のものや、2 cmにもみたない小形のものもみられる。先端には、かえし（かぎ）のついたものと、つかないものとがあり、一般的にいえば、後者は古い時期のものに多い。かえしは魚を確実に釣りあげるための装置であり、内がわにつけられるのがふつうであるが、なかには外がわにあるものや、またまれに両がわについたものなどもみられる。しかし、かえしの部分が精巧に、しかもより複雑につくられた釣針は、主として後期以降にあらわれるもので、これらは釣糸を結縛する部分（つぶし）にも、念いりな加工をみせている。

このような釣針のかたちや種類のちがいは、一つには年代の差にもよるが、また一つには対象とする魚類の生態とも関係があったとおもわれる。東北地方の太平洋岸や関東地方にはたくさんの貝塚があり、そこからは多数の釣針が発見されている。しかし、貝塚ならばどこからでも釣針が出土するというわけではない。現在の海岸線から、とおくへだたった場所にある内湾性の貝塚からは、釣針はもとより魚骨の発見さえまれである。潮の干満の差のいちじるしい内湾部の遠浅の海には、釣りの対象となるような魚類はあまり棲息していなかったためであろう。釣針が比較的目だって発見されるのは、釣りによる漁法がもっとも効果的な水域の付近にいとなまれた、外湾性の貝塚からである。

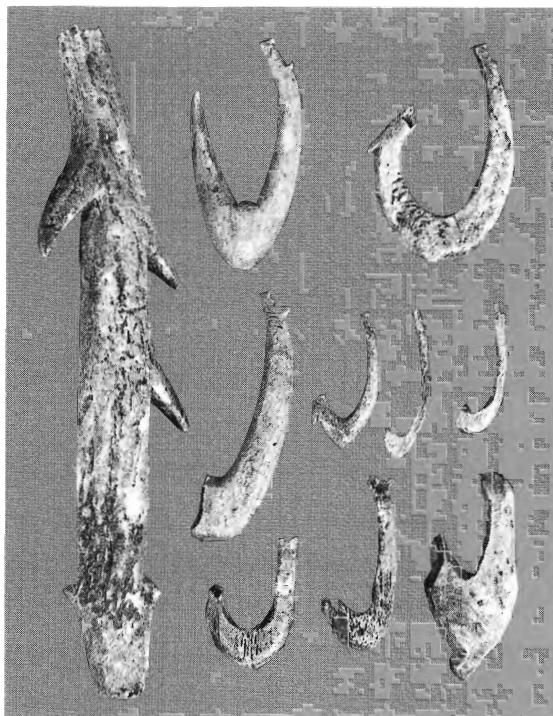


図7 後期の釣針とヤス=左端
(神奈川県堤貝塚) 縮尺1/2

近畿地方以西からは、釣針の発見はきわめてまれである。いまのところ、瀬戸内海の児島湾岸の貝塚などから、数例の出土が報告されているにすぎない。一般に西日本には漁撈具の発見がとぼしいが、これは一つには、それらを遺存する貝塚遺跡が少ないためであろう。

モリとヤス 魚を突き刺すためにもちいられた道具には、モリ（鈷）とヤス（稽）がある。ふつう獲物に投げつけて突き刺すものをモリとよび、柄をもったまま突き刺すものをヤスとよんで区別しているが、その先端部のみがこされているにすぎない考古学上の遺物のばあいには、厳密な区別はむずかしい。

しかし、紐をむすぶための突起や孔をもった刺突具は、離頭式鈷頭りとうとうとみてよいものであり、獲物に投げつけて命中したさい鈷頭は回転してぬけなくなり柄からはなれるが、その鈷頭にむしばれた紐は手もとにながくのこっているので、その紐をひきよせることによって、獲物は難なくとらえられる。このような手法のモリが出現するのは、後期以降のことであり、とくに東北地方（三陸沿岸）にいちじるしい発達をみせた。燕形鈷頭とよばれるものは、その代表的なもので、尾部がながく反り、燕の尾のようにみえることから、その名がある。この燕形鈷頭には、先端に石鏃や牙鏃をつけて、いっそう鋭利な効果をねらったものがある。このような道具の使用によって、大形の魚や海獣の捕獲は、きわめて容易になったにちがいない。

いわゆるヤスには、かぎのたくさんついたもの、一つあるいは二つだけのもの、あるいはそれのまったくないものなど、さまざまなかたちがある。そして、これらのうちには、軸のまっすぐなものと、いくらか反ったものとがあり、後者のばあいには2本ないし3本の組合せがかかる。また、横須賀市吉井貝塚⁽¹³⁾（早期末）で多数出土したヤスは、先端がちょう



図8 石鏃のついた燕形鈷頭（宮城県沼津貝塚、伊東信雄による）縮尺1/2

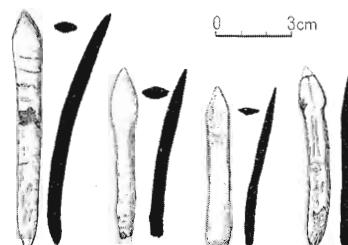


図9 ペンさき形をしたヤス（神奈川県吉井貝塚、神沢勇一による）

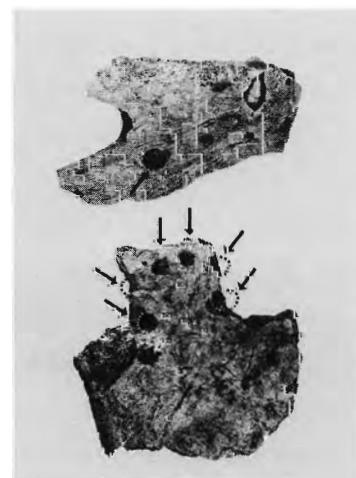


図10 ヤスの刺突痕ある魚骨

上・マダイの下顎骨（石川県堀松貝塚）、下・スズキの鰓蓋主骨（千葉県南貝塚）金子浩昌による

どにぶいペンさきのようなかたちをしており、扁平な軸はかなり反っているので、おそらく柄にたいして斜めに着柄されたものと推定される。ヤスの多くは鹿角でつくられたが、しかしあきのない単純なかたちのものには、シカの肢骨などを材料としたものがある。また、エイの尾骨を利用した例がかなりしられているが、これは鋸歯状にならんだ小さなトゲが、かぎにかわる役目をもっていたからであり、さらにそれにふくまれている自然の毒が魚類に有効に作用することをねらったものといわれている。北海道と東北地方北部出土の剥片石器のなかに、石鉈とよばれているものがある。一見すると石槍に似ているが、大きな茎をつくりだしており、たしかにモリとみることも可能である。地方的な特色をもった道具といえよう。

一般に、かぎのある立派な刺突具があらわれるのは前期以降であり、とくに後・晩期に盛行する。しかし、内湾性の貝塚から発見されるヤス類は、そのようなことにかかわりなく、ほとんどはかぎのない単純なかたちのものである。これは、内湾に棲息する魚類ががいして小形であることと関係があり、水域環境による漁具の差が、このばあいにもうかがわれるわけである。

網の存在 釣りや、突き漁は、原則として1匹の獲物を対象とし、単独でもおこないうる。いわば個人漁である。これに対し、網による漁撈は、たくさんの魚をいちどきにとることを目的としたもので、その操業は集団的にすすめられる。この意味からも、網の使用は、きわめて能率的な高度の漁法であったといえよう。網そのものの遺存例はしられていないが、その存在を間接的にしめすものとして、土錐・石錐があり、しかもその発見はきわめて豊富である。また、縄文式土器の縄文の発達からうかがわれるよう、織維技術はかなりすんでいたことがあきらかであるから、網の普及は当然のこととかんがえられる。漁網には、水域の条件に応じていくつかの種類があったろうし、またその使用法も多岐にわたっていたにちがいない。土錐・石錐での遺跡と、付近の地形のありかたとは、きりはなしてかんがえることができない。神奈川県小田原市付近には、石錐の多数発見される遺跡がいくつかあるが、海岸にちかい遺跡ほど大形のおもい石錐を多くだす傾向があるという。水域の条件に応じて、石錐のありかたが異なっていたわけである。

^{おも}錐りには、土製のものと石製のものとがある。前者は土器の破片を利用し、両端に糸かけをつくった簡単なもので、早期にもまれにみられるが、漁網用の錐りであるとおもえるようなあらわれかたを

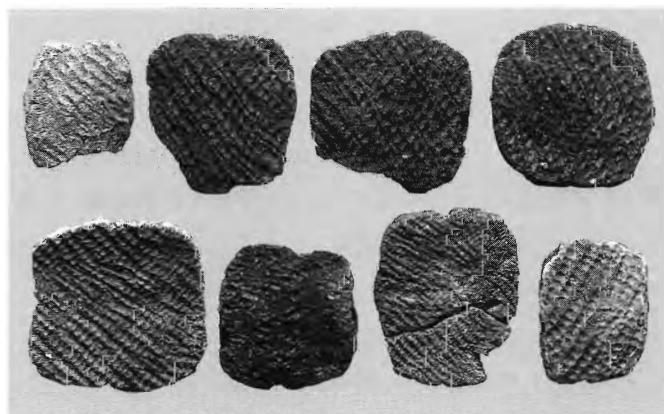


図11 土錐 前期に属する堅穴住居址の一隅からまとまって出土した、うち三個は同一の土器個体でつくられている（神奈川県西方貝塚）縮尺1/3



図12 石錘（神奈川県清水原遺跡）縮尺 1/3

いには、おもくて堅牢な石錘が適していたのであろう。

土錘のあらわれかたと魚骨の出土から類推すると、海岸部ではとくに中期の中ごろ以降、漁網の使用がかなりさかんにおこなわれたとおもわれる。漁網を利用しての漁撈活動には、組織的な協業が必要であり、また丸木舟などの重要な労働用具をつかわなければならない。丸木舟は漁網の設置などのさいだけでなく、釣りや突きをおこなうばあいにも、なくてはならないものであったし、またイルカやアシカなどの海獣をいけどるときにも、不可欠の役目をになっていた。

漁撈による獲物 貝塚からは各種の漁具とともに、縄文人によって食料に供された魚類の骨やうろこが多量に発見される。漁撈の対象となった魚類は、じつに数10種の多きにのぼっている。

クロダイ・マダイ・ブダイ・スズキ・コチ・マグロ・ボラ・イワシ・アジなどは、そのうちもっとも多く捕獲されたものである。もちろん、これらは棲息する水域がいくらか異なっているから、どの貝塚からも一様に出土するというわけではない。内湾性の貝塚からは、クロダイ・スズキ・コチ・ボラなどが比較的目だって発見され、また外湾性の貝塚からは、そのほかにマダイ・ブダイ・ブリ・サメ・マグロ・カツオなど、海洋魚をふくむ多くの種類が出土する。また、淡水産の貝よりなる貝塚（主淡貝塚、純淡貝塚）からは、まれにコイやフナなどが発見される。イルカ・アシカ・アザラシ・クジラなどの海棲の獣類も、漁撈の大きな対象であった。とくにイルカはひんぱんに捕獲されたらしく、その遺骨の発見される量はかなり多い。横浜市称名寺貝塚B地点⁽¹⁴⁾（後期古）からは、イルカの頭骨が累々とかさなって発見されたことがある。また、クジラのばあいは、直接これを捕獲したのではなく、よくいわれるようシャチなどにおわれて浅瀬にうちあげられたものを、大せいの力でとらえたのであろう。外湾性の貝塚からは、ときおりクジラの骨が出土するが、ほとんどすべては脊椎骨の一部であり、しかも加工されているものが多い。おそらくクジラは、海岸で解体処理され、部分的に各集落にもちこまれたのであろう。

するのは、前期以降である。もちろん地域的な偏差は大きい。また、後・晩期には、球状の土錘が一部に出現する。石錘もまた、手ごろな自然礫の両端に打ち欠きをくわえただけのものにすぎない。早期の後半以降一貫してみとめられるが、とくに多量に出現する時期と地域がある。また、山間部の河川にのぞんだ遺跡からも、しばしば発見される。このなかには、すり切りによるほそい溝をつけて糸かけとしたものがある。ながれのはやい山間部の河川で漁網をつかうさ

山内清男は、東北地方を中心にさかえたいわゆる亀ガ岡文化の要因として、サケ・マスの豊富な漁獲をかんがえている⁽¹⁵⁾。東北日本の縄文人は、北アメリカ西海岸の原住民のように、ながいあいだサケ・マスを主食にしていたのではないかというのである。このかんがえは、いまだ確証されていないが、たしかに産卵期に大挙して川をのぼるサケ・マスは、いつも簡単にとらえることができるし、またいろいろな方法でながく貯蔵することも可能である。サケ・マスをめぐる問題は、今後、発展させなければならない課題の一つである。

貝類の採集も、ひろい意味の漁撈といえるだろう。規模の大きな貝塚の貝類は、ふつう砂泥性のものを主体としている。マガキ・アサリ・ハマグリ・シオフキ・ハイガイ・ヤマトシジミ・キシャゴなどは、遠浅の砂泥質の海に棲息し、多量に群棲するのがならわしである。したがって、これらの採集は、いたって容易であり、またほとんど道具らしいものを必要としないから、もっぱら女性や子どもが従事した作業であるとかんがえられる。また、アワビやサザエなどの岩礁性のふかい海にすむ貝類の採集も、今日の海女にみるように、女性でも十分におこないうる労働である。狩猟や漁撈などのはげしい労働を必要とする仕事には、男性があたり、貝類や植物性食料の採集などの軽労働には女性がたずさわるといった自然的分業の形態は、縄文時代の社会をつらぬく法則の一つであった。

3 磨製石斧と打製石斧

縄文時代を通じて、石斧はもっとも一般的な道具であり、いかなる時期、いかなる地域にも普遍的にみとめられる。しかし、いちがいに石斧といっても、まず磨製と打製の別があり、さらに各種の形態にわけられることは、周知の事実である。いったい、石斧にはどんな種類があり、またそれは主として、なににもちいられたのであろうか。

磨製石斧 磨製石斧とよべるものには、アツズ (Adze) またはアックス (Axe) としての機能をもつ一般的なもののかに、両頭石斧、多頭石斧、環状石斧などの名でよばれるものが

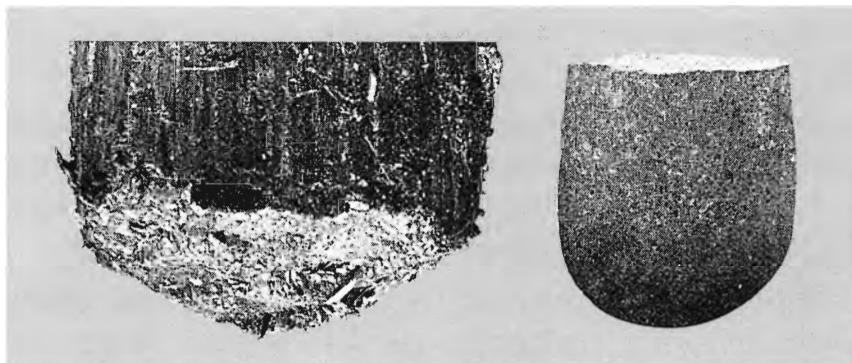


図13 切り口のある木柱と磨製石斧（福井県鳥浜貝塚、立教大学蔵）縮尺1/2

ある。しかし、これらはかなり特殊なもので、その出現する時期・地域もかぎられている。多頭石斧や環状石斧は、中部地方西部に多くみられ、晩期に属するものが大部分である。棍棒の頭に固着し、おもに武器としてもちいられたとかんがえられているが、副次的に狩猟のさいなどにも役だてられたであろう。

一般的な磨製石斧としては、断面が扁橢円形を呈するものや、棒状斧（遠州形）、あるいは定角式石斧などがある。断面が扁橢円形を呈するものは、ほとんどが両刃であり、すでに早期からみられる。棒状斧は、関東・中部地方では前・中期に発達するが、東海地方では後・晩期に多く、俗に遠州形石斧の名でよばれている。定角式石斧は、後・晩期の代表的な石斧である。なお、関東地方の早期はじめの撫糸文土器などにともなう礫器のなかには、刃部のみをみがいた石器があり、かつて局部磨製石斧の名称があたえられていた。これらも、機能的には石斧とみてよいだろう。また、いわゆる擦切石斧^{すりきりせきふ}は、北海道・東北地方に分布し、緑色を呈した比較的やわらかい石が材料としてつかわれている。

ふつう石斧は機能的に、柄と直角に刃のついたもの（Adze）と、柄と平行に刃のついたもの（Axe）にわけられ、さらに一般的には片刃のものはアッズ、両刃のものはアックスと区別されている。もちろん、これですべてを律するわけにはいかない。棒状斧のような断面のまるいものは、今日のつづきのように着柄されたとするかんがえもある。石斧の機能を一定の形態、ないしは概念からのみみちびきだそうとするのは、ただしいことではない。柄のついたままの状態や、ソケットにはまったくまの石斧など、その機能があきらかにわかるばあいは別として、多くは的確な判定をくだしがたい。しかし、いえることは、磨製石斧は主として工具であったということである。石斧は、樹木の伐採からその処理にいたるまでの工程に、なくてはならない道具であった。縄文時代においても、建築物に丸木舟に、その他多くの面で木材を利用することは、きわめていちじるしかった。このばあい、切りたおしたり割ったりするものとしては、Axe（まさかり）がつかわれ、けずったりそいだりするものとしては、Adze（ちょうな）がもちいられたとおもわれる。さらに、仕上げの段階でのこまかい作業には、ナイフとして各種のスクレイパーが利用されたとみるべきである。

磨製石斧は、みがくという関係からあまりかたい石材をつかうわけにはいかない。蛇紋岩・砂岩・閃綠岩などの比較的やわらかい石がえらばれている。したがって、剥片石器にみるようするどい刃はもたない。しかし、それとても威力は、今日のわれわれの想像以上である。福井県鳥浜貝塚（前期）からは、多数の木柱が発見された⁽¹⁰⁾が、その先端の切り口はかなり鋭利であり、直径12、3cmの木でもわりあい簡単に切りたおされたらしいことがうかがわれる。

打製石斧 粘板岩や頁岩などの石を打ち欠いて、比較的簡単につくられた打製石斧は、磨製石斧ほど一般的ではないが、その発見はかなり目だっている。とくに、中部・関東地方の中間に、爆発的な増加をみせる。打製石斧のうちには、撥形・短ざく形・分銅形などの形態がしられているが、これらは時期による差もある。短ざく形は中期に多く、分銅形は後期にかぎ

られる。

打製石斧は、どうみても工具とはかんがえられない。古くからいわれているように、これは土掘り具とみるべきであろう。堅穴住居やおとしあなを掘るさいには、もっとも効果的な道具である。しかし、役割はそれだけではなかったにちがいない。

中部・関東地方の中間に多量に出現する打製石斧をめぐって、農耕用の石鍬というかんがえが展開されたこともあるが、しかし問題は未消化である。おそらく、爆発的に増加した打製石斧は、球根類の採集という食料獲得の方法が、大きなウェイトをもって登場し、展開したことと関連があるのではないかと想像している。

縄文時代の労働用具としては、以上にとりあげたもののほかに、なお数多くのものが存在していたであろう。それらの機能と用途をあきらかにし、他の労働用具との諸関係

を追求していくことは今後の課題である。また、さらに労働用具の所有形態などの点についても、単純な結論を求めてはならないと思う。労働と生産の全過程のなかに正しく位置づけていくことが必要である。

- (1) 松本信広他『加茂遺跡』三田史学会（昭27）
- (2) 喜田貞吉・杉山寿栄男『日本石器時代植物性遺物図録』（昭7）
- (3) 甲野 勇「彌形角製品に就いて」『考古学雑誌』29—9・10（昭14）
- (4) 藤森栄一「諏訪湖曾根の石器について」『日本考古学協会第23回総会研究発表要旨』（昭34）
- (5) 伊東信雄『沼津貝塚出土石器時代遺物 I・II』東北大学日本文化研究所（昭37・38）
- (6) 鈴木 尚「日本石器時代人骨の利器による損傷について」『人類学雑誌』53—7（昭13）
- (7) 後藤守一・内藤 晃他『蜆塚遺跡—その第一次発掘調査—』浜松市教育委員会（昭32）
- (8) 甲野 勇『図解先史考古学入門』山岡書店（昭22）
- (9) 後藤守一・長谷部言人他『吉胡貝塚』文化財保護委員会（昭27）
- (10) 直良信夫『古代人の生活』至文堂（昭38）

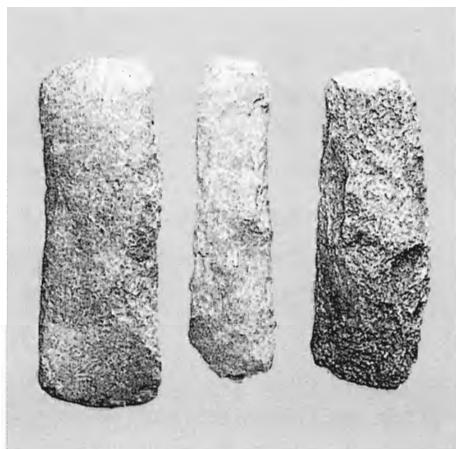


図14 短ざく形打製石斧（神奈川県大正坂遺跡）縮尺1/3



図15 分銅形打製石斧（神奈川県久保谷戸遺跡）縮尺1/3

- (11) 甲野 勇「日本石器時代産釣針」『古代文化』13—3（昭17），江坂輝弥「日本石器時代における骨角製 釣針の研究」『史学』31—1・4合併（昭33）
- (12) 金子浩昌「縄文時代における釣鉤の製作」『物質文化』3（昭39）
- (13) 神沢勇一「横須賀市城山第一貝塚出土の骨角牙器・貝製品（1）」『横須賀市博物館研究報告』6（昭37）
- (14) 吉田 格「横浜市称名寺貝塚」『東京都武藏野郷土館調査報告書』1（昭35）
- (15) 山内清男「日本先史時代概説」『講談社 日本原始美術』1（昭39）
- (16) 鳥浜貝塚調査グループ「福井県鳥浜貝塚の調査」『日本考古学協会第27回総会研究発表要旨』（昭38）
（1965年7月 『日本の考古学』II 縄文時代 河出書房新社）

* 編集注：初出文献の縦組みを横組みとした。再録にあたっては、漢数字の一部を算用数字に改めた。また、注文献の表記、および挿図の縮率の一部を改めた。